

大学コンソーシアムひょうご神戸 学生ボランティア 宮城県名取市での活動 ～伝える・繋がる・続ける～

活動紹介

私たちは、「伝える」「繋がる」「続ける」の3つの「つ」をコンセプトに、毎年メンバーが入れ替わりながらも、震災以降計7回、宮城県名取市で仮設住宅や保育所、児童センターでの交流活動を中心にボランティアを行っている。

事前学習

- ・ 講師の方を招いての震災やボランティアに関する学習を行う。
- ・ 人と防災未来センターの見学や講師のお話などから、震災を経験した神戸を参考に、震災からの復興について学ぶ

事前ヒアリング

- ・ 被災地の復興の状況について学ぶ
- ・ 現地のニーズをくみ取る→ニーズに沿った企画を考える
- ・ ボランティア先を伺い、企画の問題点を見つける。

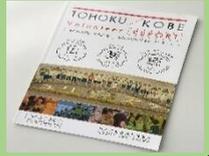


閉上の現状を

伝

つたえる

語り部の方や街づくりの関係者から震災当時のお話や復興に関するお話をお聞きし、そのことを報告会や報告書、イベント開催などを通じて神戸で発信する。



現地の人と

繋

つながる

仮設住宅において、モノづくりやお茶会、スイカ割りなどを通して、住民の方との交流を深める。また、児童センターや保育所にて縁日などを開催し、子供たちとの交流を行う。



学生ボランティア活動を

続

つづける

宮城県名取市でのボランティア活動を継続させる。(昨年で6年目)



被災地が
抱える課題

- ・ 仮設住宅から復興公営住宅と移るにつれて、新たなコミュニティ作りが課題
- ・ 高齢者を孤独にさせないために、平時から住民の方同士で進んで活動できるようなコミュニティ作りをすることが課題。
- ・ 今年で震災から6年が過ぎ、震災の風化が課題

震災・被災地ボランティアにおける大学生の役割

阪神淡路大震災が発災した1995年前後に生まれた学生が多く、幼少期から復興への取り組みや防災の生の声を聴いた学生が多い。そのため、震災復興への意識が高い。被災地でボランティア活動を行うことで、被災者も話しやすくなる。



各大学の専門性、学部学科ごとの特徴を生かして活動できる。また、ボランティア自体が学生にとって学びの場になる。



大学生のネットワークの軽さを生かして発災直後はもちろん、復興過程においてもいろいろな活動を実施できる。